

離島へき地歯科医療学

離島巡回歯科診療同行実習（2009年）について

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
腫瘍学講座 口腔病理解析学分野

仙波伊知郎

平成21年度の離島へき地歯科医療学における離島巡回歯科診療同行実習は、諏訪之瀬島（4月17～19日、勝村、加藤、川井田）、黒島（5月26～28日、延谷、鷲本）、中之島（6月8～10日、久保田、矢田）、口永良部島（6月17～20日、石井、岡田、東原）の日程、同行学生で行われた。また、授業の最終日に同行学生が報告発表した。ここでは、各同行学生の発表レポートを再編し、同行実習を通じて学生が学んだ成果の一部を紹介する。



診療には「こじか号」と「ポータブルユニット」で行ったが、こじか号は普段我々が使っているユニットと同等かそれ以上の設備であり、少し狭い以外は全く問題なく、ポータブルユニットもペダルを踏んでからのエンジンやタービンの動きにタイムラグがあるとか、パキュームの回転力が弱いといった点や、うがいをする時に洗面所に行かなくてはいけないなどの煩雑な面はあるものの、他の点では同じであり、離島であっても通常の診療が可能だという点に驚きを覚えた（東原）。持ち込める機材が意外に多いことに気付いた。診療バスの設備や器具は、狭いスペースに効率よく配置され、大きなストレスを感じることなく診療できた。島の診療所の一部をお借りして、ポータブルの器具を用いて簡易の診療チェアを作成したが、一つ一つの器具を並

べながら診療以外にも離島診療には多くのノウハウがあることを興味深く思った（石井）。



診療に来た患者さんのうち、高齢者は長年その島に住んでおりデンタルIQは高いとはいえず、残存歯が少ないことが多く、診療内容は義歯補綴がほとんどで、冠橋補綴や歯周病の治療を要する人はすくなかった。一方、小児は島出身ではない者や1ターンで島に戻った人が多く、デンタルIQは比較的高く、口腔衛生状態も良好で、予防処置や軽度のう蝕治療など、大学病院で見る治療と変わらなかった。また、仕事のためか壮年期の方の受診がほとんど無かったのが特徴的であった（東原）。小学生たちは、半年に一度の離島巡回診療時に毎回受診しているようで、口腔内の状態は良好なように思えた。う蝕治療の必要な者はごくわずか、多くはブラッシング指導やフッ素塗布だった。鹿児島市内に住んでいる子供達の多くは歯が痛くなったり、学校の検診でう蝕が見つからないと歯科を受診しないのに対して、島の子供達は親の意識も高く、半年に一度の巡回診療の機会にきちんと定期健診を受けているので、常駐の歯科医師がいなくても口腔衛生状態が高く保たれるのだらうと思われた（岡田）。



何より離島での診療の難しさを感じたのは感染根管治療や抜歯後の経過が見られないなど、時間による治療内容の制限であり、患者の生活環境を踏まえた上で、どのような治療をすることが最も良いのかを考える必要と困難を感じるとともに、大学病院の治療環境の良さを改めて実感した（久保田）。離島診療の特徴は、治療を限られた時間内で確実に行うことが必要であるが、処置内容や材料も限られるため、高度な技術、知識、経験が必要であり、また、全身疾患を有する患者のコントロールが不十分となりやすく、さらに、診療スタッフが固定されていないため患者と術者の信頼関係を築きにくいこと、などであった（勝村）。個々の患者により事情は異なるため一概に勤めることはできなかったが、巡回期間という限られた時間で無理に治療を終わらせるのではなく、望むべきは今回の巡回治療では応急処置やある処置段階に留めておき、鹿児島市内に来て治療を続けるということは、患者も理解してくれているようだった（加藤）。診療の本質ではあるが、どれだけ患者の立場に立って治療の選択肢を考え、提案し、その患者にとってのメリットとデメリットを説明できるかというところがやはり大事であるということ、生活環境に制限がある離島での医療現場を体験し、再認識できた（川井田）。



初めての私たち学生は、診療準備の際に何を何処に持って行ったら良いか全く判らず、てんてこ舞いだった。でもこれが離島診療の醍醐味の一つだとも感じた。

一から自分たちが診療できる環境を作り上げることは、日常ではなかなか体験できないことである（延谷）。一番印象に残っていることは、診療になると先生方は普段とは異なる場所で働いているにもかかわらず、すぐに連携をとり、小さな一つのチームを構成したかのように役割分担や連携ができていて驚きと言うより不思議ささえ覚える光景であった（鷲本）。巡回診療に参加するのは限られた人数であることから、一人が何役もこなしたり、専門外の治療を行う必要も出てくるのではないかと考えていたが、実際はしっかりと役割分担がなされ、体制が整っていることに驚いた。特に県歯科医師会から来られているスタッフの方々の力は大きく、歯科医師は歯科治療にほぼ専念できていると感じた（加藤）。



私達にとって離島同行実習は、非常に貴重な体験となった。離島の現状をこれから歯科医師になる人間として知ることが出来たこと、道具のない状況の中で如何に最善を尽くすことが出来るか、また島の人達の温かさ、優しさに触れることができたこと、これは離島に行ったことで初めて得られた経験だと思う。この経験を肥やしにしてこれから立派な歯科医師になりたいと思う。今回の離島巡回歯科診療同行実習では、今後、過疎地や在宅での診療に携わる際にも役に立てられる貴重な経験をさせてもらうことができ、島の住民の方々や、色々とお膳立てして下さった歯科医師会の方々に、改めて感謝したい（一同）。

